

たかが砂場、されど砂場、砂遊び —砂場からみる子どもの成長と発達—

砂場は不思議な遊び場です。砂場は、単に多量の砂が盛ってあるだけの、ハードとしては完成度の低い、まさに「砂の場」ですが、いわばソフトとしての子どもの自由な活動を最大限に引き出してくれる遊び場です。

砂場では一人でも、少数でも、大勢でも、人数に関係なく遊ぶことができます。また、乳幼児から学童、青年期まで（私の主催するワークショップでは大人も高齢者も）、それぞれの年齢に応じて遊ぶことができます。

砂場での遊びには、手指の細やかな動きから、大きな体の動きまで、多様な動きを伴った遊びが見られます。視覚や触覚的感覚を刺激し、想像や創造性が引き出され、コミュニケーションがどんどん広がります。また、微妙な水の混ぜ具合や砂質の違いを感じたり調整したりと、さながら科学者のような遊びもあれば、大胆な土木作業も可能、協同での作業場面もよく見られます。そうかと思えば、砂場はただ子どもが、ぼうっとしながら時間を過ごすことのできる居場所としての役割も果たしています。果たして砂場にはどのような要素が含まれているのでしょうか。

図1は、砂場で見ることでの子どもたちのいろいろな姿を示したものです。もちろん

児童心理学の父とも呼ばれるアメリカの心理学者スタンレー・ホール(Stanley Hall, 1844-1924)は、毎年夏、避暑地で過ごす我が子とその友だちのために砂場をつくり、そこでの砂遊びを数年にわたって観察した結果、次のような言葉を残している。

砂遊びには、勤勉な努力、見通しを持った運営、道徳、地理、数学等のあらゆる教科の要素が含まれている。もしも、それらがバラバラに、学校の課業のように教えられたとしたら、結果は無駄が多く、混乱したものになってしまうだろう。ここには完全な精神の健康と統一がある。バラバラで魂を崩壊させるような学校のカリキュラムが与える以上の、多様な内容が含まれている。多様な興味と活動を統合させる砂遊びは、教育として理想的である。教育においては、理想的なものほど实际的であり、实际的なものは理想的なものである。（津守 真『子どもの世界をどう見るか』NHK ブックス）

筆者は、2005年4月から2011年3月まで、京都市内にある保育園において当初11ヶ月だった乳児が卒園するまで、砂遊びの継続観察を行い、その結果から、乳幼児期における砂遊びの発展過程と、砂遊びに潜む子どもの発達をひきだす要素についての仮説を得ました。

図1は、まず乳幼児の砂遊びの展開仮説でさる。

1. 砂遊びの展開 —五段階の砂遊びフェイズ仮説—

(表1 砂遊びの展開仮説) 挿入

(1) 感覚的な出会いとしての砂遊び

生まれてまだ一年も経っていない八～十ヶ月の赤ちゃんたち。初めは、はだしの足裏が砂に触れただけでびっくりしたり、時には泣き出したりすることもありました。一般に、砂の感触こそが砂遊びの魅力と考えられがちですが、最初は必ずしもそうではないようです。

そんなとき、保育者はよく、子どもの目の前で手の平に砂をのせたり、手を傾けて砂を滑り落としたりしながら、まずは砂そのものをじっくりと子どもに見せていました。【写真1】また、カップをひっくり返し、何度も砂型をつくって見せています。砂は瞬時にしてその形を変えますが、このような砂の視覚的な変化に出会うことによって、子どもは自然にずっと砂に手を伸ばし、自分からの触覚的な出会いも果たします。【写真2】

砂は、子どもの身体を支える大きな環境にもなります。一歳前後の子どもたちが、比較的長時間、砂の上にとんと腰を下ろしたり、はいはいしたりする姿もよく見られました。【写真3】また、まだ足下おぼつかない時期の子どもが、砂の起伏を注意深く踏みしめながら歩きます。一歳半ぐらいになると、自分の背丈ほどに積まれた砂山に一步・一手を慎重に運びながら山頂を目指します。深部感覚と呼ばれる、身体内の筋肉や関節、バランスの調整が必死で行われていることが伝わってきます。【写真4】

砂は子どもの身体をそのまま受け止め、子どもはいろいろな感覚を通して砂と関わり、また自分自身の身体も感じ取りながら、身のふるまい方を獲得していきます。

(写真1~4挿入)

(2) 砂で遊ばない砂遊び

子どもが砂の上に座るようになったとき、空いた両手はどうしているでしょう。砂に触れたり、つかんだり、砂との関わりをどんどん広げているのでしょうか。

観察ではほとんどの場合、子どもは両手もしくは片手に何らかの物を持ち、関心はもっぱら物そのものか、それを使うことに向いていました。この時期の砂遊びは、手が直接砂に触れることよりも、物をこね回したり、振り回したり、物同士を打ち当てたり、そして物を使って砂を掘ったり集めたりします。【写真5】砂は子どもの直接的な遊びの対象ではなく、物を操作するための対象として存在しているようです。そこで、このような砂遊びを「砂で遊ばない砂遊び」と名付けてみました。

この命名が適切かどうかを確かめるために、一歳五ヶ月から一歳七ヶ月までの砂遊びが大好きな幼児五名を対象に、砂場にいっさい物を置かないという実験をしてみました。すると、やはり物が無い砂場には子どもたちは興味を示さず、数人がすぐに砂場から出て行こうとしました。【写真6】保育者が砂山を作りながら遊びに誘うことで少しは関心を示しましたが、長続きはしません。十分後、そこにいつもの物を持ち込むと、子どもたちはさっとその回りに集まり、自分の好きな物を選び三十分以上遊び続けたのです。【写真7】

このような砂で遊ばない砂遊びを通して、子どもは最初上手にできなかった物の持ち方や扱いをみるみるうちに上達させていきました。手指や手首、腕、肩、手と目の共応、身体バランスを取りながらの操作等、物に応じたあらゆる動きを着実に身につけていくのです。

子どもたちは間もなく、自分が使う物をその形に応じて、主に砂をすくうものとすくった砂をためるものとの機能別の活用を安定的に行います。これは、まさに物の道具としての扱いであり、文化の獲得です。

このフェイズの到達点、そして次のフェイズの始まりともとれる行為として、子ども自身が行う型抜き遊びがあります。これはすでに前フェイズの段階から大人や年長者が何度も子どもの前で繰り返してきた行為ですが、子どもはこれを一歳三ヶ月頃から真似するようになり、二歳頃にその完成形を見せるようになります。

砂型づくりに適した物に砂を詰め、上から押しつけ、ひっくり返し、トントンとたたいてからそっと持ち上げる。この一連の行動はまさに使用する物の理解とその物に応じた働きかけです。またこの作業は、乾いた砂ではなく少し湿った砂を用いるという砂の状態の理解と、砂がこぼれ落ちないようにスピードで素早くひっくり返すといった運動能力が求められます。これこそ次の段階「砂で遊ぶ砂遊び」の重要な要素です。【写真 8】

(写真 5～8 挿入)

(3) 砂で遊ぶ砂遊び

第三の「砂で遊ぶ砂遊び」のフェイズは、子どもの手や他の身体部分が直接砂に触れることが増え、砂の状態や形状に関心が向き、自分の手で砂の変化を引き起こしていくといった行動が特徴となります。

典型的な遊びとしては、泥団子作りがあります。子どもはまず砂と水のほどよい調合を図り、核となる砂の固まりを作ります。【写真 9】それを両手の間で転がしてきれいに丸めながら、さらに乾いた砂をかけたりして徐々に湿り気をなくしていきます。このとき力が入りすぎれば団子は壊れますが、ある程度の力を入れなければ逆に砂は固まりません。【写真 10】子どもは、砂の状態変化を作り出す科学者のようであり、ていねいな技をじっくりと発揮する職人のようでもあります。

砂で遊ぶ砂遊びには、他にも大きな砂山作りやトンネル掘りなどがあります。どうすれば、より高い山を積み上げることができるのか、どんな穴を掘れば山が崩れずにうまくつながるのか。【写真 11】これは砂の持つ物理的な特性への挑戦です。また腕や足を深く砂に埋めることを喜ぶ姿も見られます。【写真 12】

砂で遊ぶ砂遊びの出現は、手や腕の力の増加とともに、手や指を微妙かつ思い通りに動かすことのできる操作能力の向上、そして砂の感触をより敏感に感じ取ることができるようになったということが背景として考えられます。また、すでに述べたように砂そのものの状態や形状、強度等、自然・物理的な法則性への経験的な気づきが求められます。

(写真 9～12 挿入)

(4) イメージと言葉が広げる砂遊び

きれいに型抜きされた砂の固まりが皿の上へのせられ、子どもたちは「どうぞ」「いただきます」などのやり取りをします。砂のお好み焼きに「熱いから気を付けて」という気遣いの言葉も添えられます。

ある日、子どもと先生が一緒になって砂場中央に砂を積んでいました。先生が「何味のシロップがいいですか」と尋ねると、子どもたちは「イチゴ」「メロン」と返します。うずたかく積まれた砂は、どうやら「かき氷お山」だったようです。【写真 13】

また別の日には、砂山にフープとスコップが組み合わされ、そこに子どもが座って何やら唱えています。実はそれは「変身トイレ」なるもので、そこに入って用を足すと何でも好きなものに変身できるという設定でした。【写真 14】そんな子どもの考えを注意深く聞き出していた先生も、最後にはそのトイレでスイカに変身しました。

ときに砂場は全体が線路になり、電車も走りました。子どもはまるで電車か、電車の運転手になったようです。【写真 15】またあるときは、先生の誕生日を祝おうと、砂のケーキの回りに集まってハッピーバースデーを歌い、ろうそくの火を吹き消していました。【写真 16】

生活の広がりと言葉の獲得とともに、子どもたちはいろいろなイメージを膨らませ、砂を使ってその思いを形に表わしていきます。また、その思いは一人の中にとどまることなく、言葉によって他の子どもたちにも伝わり、砂を介した人間関係が作られ共感が広がっていくのです。砂は子どもの思いと言葉を引き出し、友達をつなぐ重要な素材となります。

(写真 13～16 挿入)

(5) アートとしての砂遊び

年中から年長にかけて、子どもたちの関心は動きやルールのある遊びに移り、徐々に砂場の外での遊びが増える傾向が見られます。あいちゃんたちにもその姿が見えてきた頃、私たちは砂場に左官屋さんが使う木ごてと金ごて、さらに底をくり抜いた大きなバケツを導入しました。

子どもの手の平の三倍ほどある木ごてはシャベルのように砂を掘り、ブルドーザーのように砂を集めては簡単に押し固め、しかも驚くほど肌理細かく砂の表面をなでつけることができます。【写真 17】金ごては、包丁のように砂の固まりをスパッと切ることができ、垂直のきれいな断崖や砂の階段などが作れます。そして底が抜かれたバケツはひっくり返して砂と水を入れて押し固めることで、特大の砂型が作れるのです。【写真 18】

これらの道具を見た子どもたちは、すぐに自分でもやってみようとしています。ちょうど砂で遊ばない砂遊びのように、新しい物への好奇心は高まります。ただ、以前と違うのは、子どもたちはすでに、道具を使うためのそれなりの身体の動きを身につけており、自分のなかに設定した目標に向かってその力を発揮し、創作の達成度を自分たちで評価できるようになっているという点です。

つまり、砂でこんな形を作りたい、こんな模様をつけたいという思いと、それに向かって何度も挑戦し、できたときには友だちと喜びを分かち合うといたったことができるのです。これこそアートとしての砂遊びの展開です。【写真 19】

小学校への入学を数日後に控え、子どもたちは最後の砂遊びをしました。六年間遊んだ砂場でこれまで獲得してきたあらゆる砂遊びの技を駆使し、大好きだったお話「エルマーのぼうけん」を砂場全体に作ったのです。窓やドアが掘られた大きな砂の家々、川や橋、「ごびごびさばく」や「ほたるとうだい」、「みどりこうえん」が砂場に現れ、みんなで力を合わせて川に水も流しました。最後は、自分たちの作品を園長先生に誇らしげに紹介して、保育園最後の砂遊びを終えました。【写真 20】

砂場に現れた子どもたちの作品、それは子どもたちの思いや願い、物語の世界への没入、道具使用の上達過程、友だちや保育者との関わりや共感といった、保育園時代のあらゆる場面が息づく集大成でした。